

敗者への思い慰霊と鎮魂 六道の「戊辰之役戦士墓」

宇都宮伝統文化連絡協議会長 柏村 祐司



六道の閻魔堂



六道口に祭られる戊辰之役戦士墓

宇都宮女子高校の正門前の道を南へ行くと変則十字路があり、その付近を六道という。六道とは仏教用語で、生前の行為の善悪によつて死後に行き先が決まる六つの世界をいい、この死後の行き先を決めるのが閻魔王である。変則十字路の角に閻魔王を祭るお堂があるところから六道の名がついた。

この閻魔堂の反対の角に「戊辰之役戦士墓」と刻んだ碑がある。この六道付近は、戊辰戦争の激戦地であった。慶応四年四月二十三日(新暦五月十五日)、宇都宮城の争奪をめぐり大島圭介率いる旧幕府軍と大山弥助(巖)と野津七次(道貫)率いる薩摩・大垣藩の連合軍を主力とする新政府軍との間で激戦が繰り広げられたのである。この結果沢山の戦死者が出たが、新政府軍の戦死者は近くの報恩寺や光琳寺の官修墳墓に手厚く葬られた。一方、賊軍とされた旧

幕府軍の戦死者は、地元住民によつて密かに埋葬され満足な供養もなされず、後になつて「戊辰之役戦士墓」の墓碑が建てられたのである。

その墓碑建立のいきさつはこうである。戊辰の戦いは、その後会津へと進展していった。九月上旬、長岡の戦いに敗れ、越後高田から転進してきた山本帯刀率いる長岡藩兵は、会津若松郊外飯寺で、戸田三男率いる宇都宮藩兵を友軍と間違え捕えられた。濃霧で見誤つたのである。知らせを受けた新政府軍の軍監中村半次郎(薩摩藩士)は、山本に降伏を勧告したが、山本は毅然として拒否、翌日、山本以下長岡藩士十四名は斬首された。直前山本は自らが所持していた愛刀と軍用金二百両を戸田三男に相当の費用に充ててほしいと託したというのである。

戊辰戦争後、戸田三男は金二百両を基金とし、山本以下長岡藩士の

慰霊供養のため墓碑を建てようとした。しかしことはそう簡単には行かなかった。戦争の傷跡がまだ癒えぬ時期、賊軍の汚名を着せられた旧幕府軍戦死者を供養するなど、ましてや新政府軍に所属した者が建立するなどあり得なかつたのである。

こうした風潮が改まるには時間がかかった。ようやく明治七年(一八七四)六月、激戦地であつた六道の辻を墓碑建立の適地として選び、墓碑を建立したのである。墓碑には官修墳墓にあるような戦死者の名はなく「戊辰之役戦士墓」とだけある。賊軍であつた彼らの名を記すのははかられたからである。墓碑裏面には戸田三男等七名の旧宇都宮藩士の名前とともに地元民七名の名前が刻まれている。墓碑建立には、戸田三男等旧宇都宮藩士たちばかりでなく、地元民たちも加わつたのである。

戸田三男たちにとっては慰霊をようやく果たした安堵の思いがあつたらうが、地元民たちはまた異なつた思いがあつたに違いない。日本人には、若くして非業の死を遂げた霊は崇るとする御霊信仰があり、祟りを防ぐために神として祭る風習がある。地元民は旧幕府軍戦死者の霊を「賊神様」と呼んでいたのはその表れではなかつたらうか。満足な弔いもされず埋葬された旧幕府軍戦死者の霊の鎮魂、地元民の墓碑建立にはそうした思いがあつたものと思われる。

墓碑に今なお誰が手向けるのか献花と線香が絶えない。宇都宮市民の暖かな心を見るのである。